
悪趣味な少年達一生還ゲームー

高橋博子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪趣味な少年達―生還ゲーム―

【Nコード】

N0885F

【作者名】

高橋博子

【あらすじ】

怪談、噂、都市伝説好きの6人が今回興味を持ったのは学校の七不思議。深夜12時、理科室に足を踏み入れた男女は全員失踪して――。6人に用意された想像を絶するゲーム、そして次々に明かされる衝撃の真実！

第1話：拒否権0

「七不思議？ やっぱりそういうのってウチの高校にもあるの？」
大きな瞳に肩程まで伸びた黒髪。彼女の名は八軒玉。はちのき ひかる

「どこにでもあるさ。日本人が通っている学校ならね」
黒い縁の眼鏡に茶髪。杵淵傑はきねぶち すぐる楽しそうに笑みを浮かべた。

「楽しそうじゃない。どんな話よ」
背中まで伸びた綺麗な黒髪に長い睫毛。かみうち あずさ神内梓は玉の頭に右手を置いた。

「そ、それが今回はかなりヤバイらしいのよ！ そうなんでしょ？」
傑

首を巻く様にしてうねる茶色いショートヘア。怯えた様な表情
を見せる彼女の名は清水剣。きよみず つるぎ

「興味あるなあ。傑の話はいつも面白いから楽しみだ」
良く言えば優しい瞳、悪く言えば伏目がち。男性にしては少し長
めに髪を伸ばしているのは沼原聖。ぬまはら さとし聖は椅子に座り、傑の方に体を
向けた。

「ああ、面白そうだ。話せよ傑」
まるで刺さりそうなツンツン頭に鋭い瞳、あらまき まだら荒巻斑は傑を促し、そ
して傑は小さく微笑み口を開いた。

悪趣味な少年達―生還ゲーム―
第1話「拒否権0 (boys and girls don't
have a right for absence)」

「この高校ってさ、並か水準以下ってぐらいの設備のクセして何故
か理科室だけは4つもあるだろ。しかも結局、その内の2つは完全

に閉鎖されてて誰も出入り出来ない様になってる」

傑は顔の前に人差し指を立てて話す。

「何故だか分かるか？」

傑は得意そうに玉の顔を見た。玉は視線を傑から外さずに首を横に振った。

「……呪われてんのか。理科室が」

斑は嬉しそうに答えた。

「おっ、良い勘してるね斑。その通り、この高校の理科室は呪われてる」

「最初の事件は40年前、フザけて学校に寝泊りしようとした奴らが第1理科室に荷物を残して全員消えた。当然警察沙汰になってかなり力入れて搜索されたらしいけど、誰一人として見つからず。以後40年間、死体すら出てこなかったらしい」

「それ以後噂を聞きつけた奴らが何度も夜中第1理科室に忍び込んだらしいんだけど、その度に全員消えた。そんな事が続く間に学校は第1理科室を閉鎖し、一時間事件は終わった様に思えた。でもそれでも知的好奇心の絶えない奴らは代わりに第2理科室に忍び込み、やっぱり全員失踪。死体も何も無し。完全消滅」

傑は所々5人の顔を見ながら、話を続ける。

「最も興味深いのが16年前。この時も深夜に理科室に忍び込んだ12名が失踪したらしいんだけど、この時はその内6人が帰ってきたらしい。当然の様にその内5人は警察の尋問責め。でも5人は何一つ語らなかった。警察のどんな質問にも一切答えず、『何か答えなければお前ら5人を容疑者として逮捕する』みたいな違法尋問にも無反応。結局、この一連の事件は完全に迷宮入り」

「……5人？ 帰ってきたのって6人じゃないの？」

梓が恐る恐る傑に尋ねた。当然の疑問だ。

「ああ……これがこの話の凄いところさ。警察は、帰ってきた残りの1人については会った瞬間に尋問を諦めたいらしい。心身共に健康な人間なのにだよ？ 何故だか分かるか？」

玉や剣は何も反応を示さなかった。答えるまでも無いからだ。傑は斑の方に目をやったが、斑も首を横に振る。

傑はフフと笑った。

「帰ってきた5人はいずれも20代の男女だったんだが、なんと残りの1人は生後1年にも満たない乳児だったのさ。当然、何も答えないし何も判らない。これがこの一連の事件の最大の謎だ」

「……………」

玉は顔を青ざめたまま固まっていた。

「確かに、凄い話ね……。その話の場面がこの学校の理科室だなんて」

剣は右手を口元にやって大きく息を吐いた。

「だろ？ ……で、提案なんだけどよ。今夜、俺らで理科室に忍び込んでみようぜ」

「バカ何言ってるのよ！？ 私そんなの嫌よ！？」

「そっ、そうだよ！ そんなのやだよ！」

剣と玉は血相を変えて傑の提案を取り下げさせようとした。

「い、いやっ、まあ今回忍び込んでみるのは第3理科室だしさ。それに十年以上も昔の話なんだし」

「それでも嫌よ！ 私は絶対嫌だからね！？」

剣は本当に嫌がっている様だった。玉もそれに同意見であり、剣の言葉に頷く。

「おいおい何言ってるんだ、こんな面白そうな話なかなえぜ？ それにこういう時、結局一番楽しんでんのはお前らじゃねえのか？」

剣、玉」

斑は笑いながら剣と玉にそう言い放った。

「い、いや……まあ」

「それを言われると……………」

剣と玉は観念した様に斑を見た。

「決定だな。それじゃ今夜11時半、理科室に集合だ」

傑は意気揚々とそう言うのと、席を立ち上がり教室を出て行った。

――放課後

腕時計の針は11時50分を差している。玉は校門の前で立ち止まり、息を呑んだ。

6人共が少なくとも片親を亡くしているという奇妙な共通点からかどうかは分からないが、6人はとても仲が良かった。いつも6人で集まっては、怪談や都市伝説の話等に華を咲かせている。勿論、普通に遊びもする。

玉は、何の躊躇も無く5人の事を親友だと思っていたし、それは他の5人も同様であった。

玉は校門横の細い隙間から通り抜け、体育館横にある第3理科室を目指す。第3、第4理科室はその事件以降に増設されたもので、位置が他のそれとは少し離れている。

理科室には、既に5人が揃っていた。玉は外靴を脱ぎ、理科室の窓から入り込んだ。

「来たな、玉」

「傑……。本当に大丈夫かなあ……」

玉は今にも消え入りそうな声で傑の袖を掴んだ。

「もし噂が本当なら……私達……」

剣もまた、七不思議の一つに怯えている。

「ああ……とんでもないスリルを味わえるぜ」

斑は嬉しそうに体を震わせた。

「そうじゃなくて私達の心配をしてよ! もう!!」

「フフ、諦めな。お前だって何が起こるか楽しみで仕方ないって顔してるぜ」

「……………じゃなきゃ来ないわよ…………」

剣は椅子に座り込んだ。

「11時58分……。そろそろね」

梓は理科室の時計と自分の腕時計を見比べながら言った。

「ああ。色々な説はあるが、12時きっかりに何かが起こるって話だ」

傑もまた自分の腕時計に目を落とし、たった今11時59分になった事を確認した。

「59分……。10秒……」

梓が時間を読み上げた。

「……20秒……」

恐怖に体を震わせる玉。

「30秒……」

真剣な顔つきで時計を見る斑。

「……40秒……………」

頭を抱えて机に突っ伏す剣。

「50」

高い位置にある理科室の時計を見上げる聖。

「60」

口元に笑みを浮かべ、傑がそう言い放った。

『ピン、ポーン、パーン、ポーン』

「!!?」

理科室のスピーカーから大音量の機械音が流れ出した。

『本日はお越し頂き真にありがとうございます。6名様の参加を確認しました。』

「おい傑、なんだよこれ!?!」

「知るかよ!　だが……何かが始まるんだ………!!」

金属で黒板を引っかいた様な音と共に6人の足元が光る。

「まっ、斑!」

玉は斑の袖を掴んでいた右手に力を入れ、斑の腕を引き寄せた。

『送信いたします』

6人の姿は跡形も無く消え、開きっ放しの窓からは冷たい風だけが吹き込んでいた。

6人は部屋の様な場所に立っていた。何も無く、ただ真っ暗なだけなそこは6人に部屋の広さや高さを掴ませなかった。

「何よ……ここ………」

剣が呆然とする。

「……………」

傑も天井を見上げたまま何も話さない。

「バカな……本当に……………」

斑はそう言って腕にしがみついている玉を胸元に抱き寄せた。

『ピーン、ポーン、パーン、ポーン』

再び先程の機械音が鳴り響く。

『この度は「生還ゲーム」へのご参加、真にありがとうございます』

「『生還ゲーム』！？　なんだよそれ！」

斑が音のする方へと声を荒げた。

『それではこれより、6名様の適正テストを行います』

声は斑の質問を一切気にせず話を進める。と言うより、こちらの声は向こうに聞こえていない様だった。

『これから100の質問を致しますので、正直にお答え下さい。より率直なデータを求めるため、回答は頭の中で「○」か「×」かを思い浮かべるだけで結構です。最初に頭に浮かんだ回答がそのまま使用されます』

「受けるしか……ねえのかな……」

真っ暗な中で互いの姿は見えてはいないが、斑は傑の方に目を向けた。

「……だろうな」

『第1問。過去の情報と未来の情報、重要なのは過去の情報だ』

『第5問。読書と音楽鑑賞、音楽鑑賞の方が好きだ』

『第22問。一番の親友と祖母、どちらかと言えば親友の命を優先する』

『第29問。春夏秋冬、一番好きな季節は夏か冬だ』

『第38問。火事か落雷、絶命するなら火事の方が良い』

『第39問。こき使うよりこき使われたい』

『第55問。視力か聴力、失うなら視力』

『第61問。「金持ちで容姿端麗」か「貧乏で不細工」、結婚するなら後者だ』

『第69問。寿命が40年縮まるか破産、どちらかと言えば破産した方が良い』

『第91問。真っ当な寿命を迎えたら、過度な延命処置は望まない』

6人は、一言も発さなかった。ただ黙々と、出された質問に答える。

『第100問。人を殺すより、殺されたい』

6人はそれぞれそれに対する答えを頭の中に浮かべた。

『ご協力ありがとうございます。これで適性テストを終了します。これより皆様にはこのテストの結果に沿って行動して頂きます。落ち着いて行動すれば無事に現実世界へと帰る事が出来ます。頑張ってください』

(現実世界……。てことはここは……)

傑は右手で左腕を摩った。

『それでは、生還ゲームを開始致します。皆様の健闘をお祈りしています』

そう言うと6人は再びその場から消えた。

(……………)

どれ程時間が立ったかは良く分からない。気付くと玉は広大な大地に一人立っていた。

(ここは……!?!? 他の皆は……!?!?)

玉は辺りを見回したが玉の他には誰もいない。途方に暮れていると上空より輝くボールの様なものが降りてくる。

ボールは玉の頭上の辺りで止まり、その場に浮遊した。

『八軒玉様ようこそ。早速ですが、私がゲームについての説明をさせて頂きます』

「あの……他の人は……」

『このゲームにおいて、各プレイヤーは適性テストの結果に沿った「役割」^{ポジション}に就きます。各プレイヤーにはその「役割」^{ポジション}をこなしながらゲームクリアを目指して頂きます』

相変わらず、こちらの話は聞かない様だ。

『八軒玉様の「役割」^{ソーサラー}は【魔術師】^{ソーサラー}です。八軒玉様にはこのゲームにいる間、【魔術師】^{ソーサラー}としてゲームクリアを目指して頂きます』

(魔術師……………)

『魔術師でいる間、八軒玉様は魔法を使う事が出来ます』

「!」

『使える魔法は一種類、「対面した相手の記憶を読むこと」です。お互い顔を認識できる状態で対面した時、八軒玉様は対面した人物の過去の記憶を読み取ることが出来ます。この魔法は全自動で行われ、記憶の「充填」^{リロード}は2分置きに行われます。ご注意下さい』

(魔法……記憶……顔……)

『そして最も重要なのが、八軒玉様が現実世界へと生還する方法で

す。この世界では各プレイヤーに「勝利条件」と「敗北条件」が設定されており、「勝利条件」を満たした場合は何事も無く無事生還、「敗北条件」を満たした場合も特に何事も無く絶命致します」
(……………)

『そして、八軒玉様の「勝利条件」は「ゲームマスター【支配人】に触れながら」ゲームマスターはあなたですね』と宣言すること』です。これをこの世界では俗に「ゲームマスター【支配人】を捕獲する」と言います。つまりところ、八軒玉様の勝利条件はゲームマスターを捕獲することです。ちなみに、ゲームマスター【支配人】も今回八軒玉様と共にゲームに参加されたプレイヤーの中の一人です』

「………………。それだけ…………？」

『そして、八軒玉様の「敗北条件」は』
(こっちの声は向こうに聞こえていないの忘れてた……)

『「ゲームマスター【支配人】との対面後、3分以内に勝利条件を満たせない」ことです。これら勝利条件、敗北条件、特殊魔法について充分理解した上で、本ゲームをお楽しみ下さい。これで説明を終わらせて頂きます』

そう言うと光輝くボールは消え、玉は再び一人広大な大地に取り残された。

「……………」

玉はその場に膝を抱えて座り込む。

しかし少ししてすぐに立ち上がり、再び周囲を見回した。

(やった……これなら私にもできる！ できるよ！ ゲームマスターを探すのは少し大変かもしれないけど、とにかく出会っちゃえばゲームマスターは皆の中の誰かなんだし、『ゲームマスターはあな

たですね』って言うぐらい簡単に許してくれるよね)

玉は右手を握り締め、気合を入れ直した。

(よし……頑張ろう！ 絶対6人で現実世界に帰るんだ………！
！！)

ジジジ……ジジジ

テレビが擦れる様な音の中、暗い部屋で一人聖は椅子に座り込んでいた。

膝立てに肘をつき、顔を傾け右手に顔の体重を掛ける。

ゲームマスター
【支配人】…沼原聖

敗北条件…他のプレイヤーに捕獲されること

第2話..「意思」

ゲームについての説明を聞き、居ても立ってもいられなくなった玉はスタート地点からだただひたすら真っ直ぐに走り続けた。

(勝利条件と敗北条件、そして魔法……………!! 記憶を読み取るって魔法がこのゲームに必要なのかどうか良く分からないけど、必要なんだよね、多分……………)

走っては歩き、また走っては歩きをどれだけ繰り返したかは分からない。

滴る汗を拭う事も無く、玉は地面に立てられた看板の横で足を止めた。

「町……………!!」

ゲーム開始より2時間後、玉は「プレフィス」へと到着した。

第2話「意思(intention)」

(この世界にもこんな所があるんだ……………)

回る水車にいかにもな酒場。そのレトロな風景は、玉が今までに描いていた「ファンタジー」世界のイメージにとっても近い。

「!!」

その場に立ち止まり辺りを見渡している玉の目の前を、人間が横切った。

(知らない人……………。他にもプレイヤーがいるの? それともゲームの中のキャラ……………?)

痛みすら帯びる足の疲労が引いていくのに連れ、玉は自分が空腹に陥っている事に気付く。

(お腹……………空いたな……………)

辺りを見渡せば、食事をとれる様な店はいくつも目に入る。玉はそれらを尻目に見ながらズボンの尻ポケットに手を当てた。

（お金……どう考えても使えないよね……）

財布に入っているのは当然の様に現実世界の日本円。それがこの世界でも通用するとは思えなかった。

（ああ……お腹空いたあ……）

玉は下腹部に手を当て、ぐったりと頭を下げた。

（これじゃ、私普通に死んじゃうよ……。どうしよう）

その時、玉は自分の右肩に誰かの手が乗ったのを感じた。反射的に後ろを振り向くと、そこには傑が立っていた。

「よっ、玉」

傑は陽気に右手で敬礼のポーズをとった。

「……傑！」

仲間との合流に安堵し、玉は傑の方に体を向けようとした。しかしその意思と相反し、玉の体は瞬間硬直する。

『ダウンロード
読込』

傑の脳から玉の脳へ、膨大な量の記憶が流れ込む。

玉は一瞬視界が眩み、その場でよろめいた。

「玉！？ おい、どうした！？」

玉の頭の中を傑の記憶が巡る。

勝利条件…… 梓の顔…… 役割…… 眼鏡を掛けた中年の男性

…… 6人…… 死体……。

玉は鳴咽を漏らし、傑の胸に手をついた。

「おい、玉……！？」

「だ、大丈夫……。ちょっと疲れただけ。ずっと走ってきたから」

「……………。とりあえずどこか中に入ろう」

この時、優れた洞察力を持つ傑は玉が本当の事を言っていない事に気が付いていた。

それでも傑は玉に肩を貸し、ゆっくりと優しい歩調で歩いていた。

「久しぶりの参加者ですね……」

薄暗く閑散とした大部屋、すっかり老け込んだ老人。

「ああ……フツツ、実に長かった……！ 何年振りだ？」

金髪の男は感慨深げそうに笑みを浮かべる。

「十五年以上振りになりますか……。『第2世代』以来です」

「あゝ、あア……！ フツフツ、アイツらか……！ アイツらは凄かったな……！ お前もそう思うな？ オイ……！」

金髪の男は顎で老人を指した。

「ええ……私も、彼ら以上のものはまだ知りません」

「だろうなア……！ フッフ、今でも奴らの事を思い返すだけで笑みが零れる……！ ……よし、お前ローキを呼べ！」

「……はっ？ ここに呼ぶんですか？」

老人は驚いた様に聞き返した。

「あア。なに心配するな、一つ言いてえ事があるだけさ」

「…………」

それを聞くと老人は黙って部屋を出た。

「……失礼します」

10分後、ノックと共に若い男性の声とその薄暗い声を訪れる。

「……入りな」

男は扉を開け、中を見渡した。中には金髪の男がいて、若い男はそれに向かって一礼した。

「……御用ですか？」

「あア……お前、今回の参加者の事は知ってるか？」

「！ いえ……来たんですか」

「ああ。今回の参加者は6人だ」

金髪の男は右手をヒラヒラさせながら話した。

「……それでローキよ。お前ら、こいつら6人には一切手エ出すな」
それを聞いた若い男は血相を変えて反論する。

「！！？ 何故ですか！？」

「何故？ フッフッフ……！！ あアゝすまん、そりや当然の疑問
さ……！！」

金髪の男は右手で顔を隠しながら笑う。

「……理由を教えて下さい」

「それが『クリエーター創造主』の意思だからさ……！！」

「！！！！」

金髪の男はローキの前に右手を差し出し、その人差し指でローキ
に対して「帰りな」という動きを見せる。

「……………。失礼しました」

ローキは頭を下げ、一人で部屋を出た。すぐに他の男がローキの
元に駆け寄る。

「ローキ様！ 一体何の話だったんですか？」

「……………」

ローキは激昂した。

顔を歪ませ、唇を噛む。

「今回の『参加者』6名、一人残らず皆殺しだ」

第3話..「誤認」

「魔術師^{ソーサラー}? それが玉の役割なのか」

傑は驚いた様に目を丸くした。

玉と傑が出会ってから5分。玉は既に2回の充填^{リロード}を済ませ、傑が自分の異変に気付いている事を知っていた。

「魔術師か……。何か魔法使えたりするのか?」

玉は首を横に振った。

「ううん、そう思って色々試してみたんだけど何も無かったの」

玉はなるべく異変に気付かれない様、限りなく自然な表情と口調を使った。

「そうか……。でも魔術師ってぐらいなんだからその内何か使える様になるかもな」

「そうだと良いんだけど……」

玉は嘘を吐いた。「記憶を読み取る」魔法を使えるという事が相手の心情にどういう影響を与えるかという事を玉なりに理解していたからだ。

(目が合っただけで自分の記憶や考えている事を読み取られるだなんて、誰にも言えないよ……)

玉は目を伏せ手元のグラスを口元へ運んだ。

緊張で鳴りそうな喉を、グラスの中の水分で掻き消す。「先程の玉の異変は疲労からきていたものだ」と傑が考えてくれるまで、玉は限りなく「普段の自分」を演じようと考えていた。

「だが勝利条件がそれだけって事は、やはりゲームマスターを探すってのがかなり大変な事なんだろうな」

「だよね……。何の手掛かりも無いし、どうすれば良いか……」

玉はグラスをテーブルに置く。それと入れ替わりに傑はグラスを口元へ運んだ。

(やはりおかしいな、玉……。……。明らかに挙動不審だし、何か隠

している……)

傑は黒い縁の眼鏡の奥から玉の顔を眺めていた。少し黙っている内に玉と目が合ったが、玉はすぐに目を逸らす。

(……まあこんな事態だ。態度に異変が出るのも当然と言えば当然かもしれないが……)

傑はグラスをテーブルに置いた。玉はグラスとテーブルとが触れ合う際の音に反応し、ハーフパンツのポケットから携帯電話を取り出した。

(携帯か……)

傑は溜息をつき、天井を見上げた。

(携帯さえ使えればなあ……。……父さん、心配してるかな)

機能する筈の無い携帯電話の入ったポケットに手を当て、傑はもう一度溜息をついた。

「す、傑………!!」

携帯電話を開いた玉が、声を震わせて傑を呼んだ。傑は首を降ろし、顔を玉に向けた。

「……携帯が、繋がってる………!!」

玉は震える両手で包み込む様に携帯電話を支えていた。

「物理的に有り得ないだろ、それ………」

傑は何ら表情を変えず淡々と答えたが、今自分達が立たされている状況を考えれば何が起こってもおかしくは無いとすぐに思い直した。

「いや、ちよつと見せてくれ………」

傑は身を乗り出し顔を近づける。玉は携帯電話の画面を差し出した。

その携帯電話の画面では、電波が3本立っていた。

第3話「誤認 (misunderstanding)」

「ここか……」

ズボンから連なる鎖のチェーン。それらをジャラジャラと鳴らしながらローキは玉と傑のいる店の外に到着した。

その後ろには6人の男達。それらの男達は皆屈強な体をしている。
「いくぞ」

ローキは指で男達に指示を出し、店の扉を開けた。

ローキを先頭とする7人の屈強な男の集団。それは嫌でも店内の者の目についた。

「気にするな。目的はあくまで今回のプレイヤー達だ」

目を大きく見開いて店内を見回す。特に広くもない店内、すぐに玉と傑のいるテーブルに目をつけた。

「いたな……」

ローキはその鋭い口元に笑みを浮かべた。

ローキ達が傑達の元へ近づこうとしている時、傑は既に自分達の身に危険が迫っている事に気が付いていた。

（なんだあいつら……。あれも他のプレイヤーなのか！？）

淡々と、かつ有無を言わさぬ威圧感を放ちながら、ローキは傑達のテーブルの横に立った。

（……………！！　くそっ……………！！）

傑は正面を向いたままやり過ぎそうとした。と言うより、ローキの方を向く事が出来なかった。

「表にでろ」

低く、重量感を帯びた声でローキは言い放つ。傑は両手を膝の上に置いたまま動けない。

片や、この突然の状況を何一つ理解していない玉はローキの目を真正面から見る。

『ダウンロード
読込！』

ローキの脳から玉の脳へ記憶が流れ込む。

(……………!! この人は……………)

玉は、「自分達が今置かれている状況の理解度」において傑を一瞬で抜き去った。それと同時に汗が噴出し、掌が湿る。

「聞こえないのか？ 立て」

細く鋭い瞳、決して大きくは開かない口、重く体中を突き刺す様な声。それらが傑と玉の体を締め付ける。

「……………」

いつまでも立ち上がろうとしない傑と玉に痺れを切らし、ローキは右手を上げた。

爪の伸びたその右手で傑の頭を掴み、力を入れる。

ローキの首筋を刀剣が捉え、そしてローキの体は勢い良く地面に叩きつけられた。

「……!!」

その轟音と衝撃で傑の体の痺れは解け、傑は顔を左へと向ける。

「……………!!」

清水剣が刀剣を肩に掲げ、誇らしげに立っていた。

「剣、お前……………」

その7人の集団の中ではリーダー的な位置にあるローキが吹き飛ばされたからであろうか。他の6人は腰を引き、剣と距離をおこうとする。

「情けないわよ、傑。ちゃんと玉を守んなさいよ」

剣はそう言って笑った。立ち上がったローキの右手が剣の顔を襲う。

その右手は、剣の顔にあと少しで届くという寸での所で止まった。傑が、剣にのみ集中していた視線を広げると、剣の刀剣がローキの首筋に突きつけられている事を知った。

「……………!!」

「私のポジションは『剣士』^{ソルジャー}。悪いけど、結構強いわよ」

ローキは悔しそうに嗚咽を漏らした。とは言えこの状況では動く事は出来ない。

「ロ、ローキ様!! ここは一旦退きましよう!!」

「ぐっ……!!」

剣は刀剣を下ろし、ローキを逃がす。

ローキは店を出る寸前に入り口付近のテーブルを思い切り蹴飛ばし、テーブルの上の調味料等を全てぶち撒けて出て行った。

剣は呆気にとられている傑と玉の方に体を向き直した。

「よっ、傑、玉」

「あ、ああ……………」

傑は自分の横の椅子を引いた。剣はそこに座る。

「あ、ありがとう。剣が来てくれなかったら危なかった」

「いーのよ。こんなポジション、その為に存在してる様なもんだしね」

剣は玉に断りを入れてから、玉のグラスの中身を口へと運んだ。

「それに、どうせ今のも『盗賊』^{バンデット}の奴らだろうしね」

「バンデット?」

「ええ。『盗賊』^{バンデット}のボスの首を獲る』。それが私の勝利条件よ」

傑は、初めて聞く内容であるそれに対してそれなりの反応を返したが、当然この時既に玉は全てを知っている。剣の勝利条件も、敗北条件も、特殊能力も、今回のこのゲームの参加者が自分達だけである事も。

「剣士の特殊能力として、私かなり強くなってるみたいだから下っ端とかなら問題無いんだけど、ボスってのは問題よねー。倒せるかしら」

剣は困った様な表情をする。

「……でもお前、首を獲るってつまり、殺すんだろ? お前にできるのか?」

傑は深刻な顔をして問う。

「大丈夫。今回プレイヤーって私達だけらしいのよ。つまりそれ以外は皆ゲームのキャラ。命を持たないのよ。正直グロいのは苦手だけど、クリアの為ならそれぐらいで四の五の言ってらんないわ」

そう言って剣は再び玉のグラスの中身を飲む。

（……そうか、じゃあやはり店内にいる奴らも皆ゲームのキャラ……）

「だからとにかく、私のゲームクリアへの障害は純粹に盗賊のボスに勝てるかどうかでだけ。制限時間とかは特に無いみたいだし、じっくりやるわ。焦って返り討ちに遭っちゃ笑い事じゃないからね」
「……そうだな」

傑は恐らく、このゲームに来て初めて笑った。

「あっ、あああっ………！！　いてえ！　首がいてええええ！！！！」

薄暗く涼しい部屋。ローキは首をおさえてのた打ち回っていた。

「オー……わめくなローキ。みつともねえ………！！」

派手な金髪に右手の指全てに通っている指輪。男は笑ってローキがのた打ち回る様を眺めていた。

「うるせえっ！！　そもそもアンタが奴らを襲うなどかなんとかぬかしやがるから、こちとら全力で戦えなかったのさ！！　次からは思い切りやらせてもらう！！！！」

「ン……次はねえよ、ローキ……。お前はもう1回も俺の命令に背いたんだぜ？　この世界で、人の命令を聞けない奴の事を何と呼ぶか知ってるか？　『クズ』さ………！！」

「だから、その命令が意味分からねえって言うんだよ！！　何故奴らを特別視する！？」

「フフ、だからそれが創造主の意志だからだよ………！！」
ローキは齒を軋ませた。

「うるせえ!! 俺は奴らを襲うのをやめねえからな!! あのクソ女、絶対ブツ殺してやるッ!!」

「……………」

男は笑い、立ち上がった。

「ン……フフフ、ローキ、ローキ。哀れな男よ。俺の言ってる事が分からねえか？」

男はローキの首筋を掴む。

「ぐああっ!! やめろ! いてえんだよ!!」

「ちよつと腕が立つからって好きにやらせてりやすぐこれだ……。コレだからバカつてのア使い道に困る」

男が更に力を込めると、ローキの足は地面を離れた。

「なっ……! お、オイ、やめろ!」

「ローキ……ローキよ! オメエらの様なバカは黙って俺の言う事を聞いてりや良いのさ……! 違うか!？」

男の問いにローキは答えられない。声が出ないからだ。次第に呼吸も苦しくなる。

「お前らの代わりなんざ、いくらでもいるんだぜ……!？ ええ？

エキストラ
『端役』よ……………!!」

「がっ……やめ……………」

ローキは薄れゆく意識の中、必死に男の右腕を掴んだ。

「フフ。この世界じゃあ、『バカ』と『クズ』は死ぬ決まりさ」

生々しい音を立て、ローキの首は折れた。男の腕を掴んでいた右腕は力無く解け、両手両足がだらりと揺れる。

男がローキの首を離すとローキは床に崩れ落ち、あの機械音が流れる。

『エキストラ1名の絶命を確認しました。現実世界に返します』

「ああ、そんなバカクズさっさと持っていっちゃまえ……………!」

ローキの体は光に包まれ、そして消えた。

「フフ……フフフ、それにしてもやはり、今回の奴らは骨がありそうだ……………」

男は椅子に座り直し肘をつき、右手に顔の体重を掛けた。

「もう邪魔は要らん、お前らなりの結末を見せてしろ！ 第3世代の少年達よ……………！！」

男の声がいつまでも、薄暗く涼しい部屋の中に響き渡った。

第3話：「誤認」（後書き）

サブタイトル候補、ボツ案1

第3話「バリ3 (the cell phone produce
d by DocMo's electric wave wi
ll be good)」

（FOMAは繋がるケータイへ）

結構悩んだ後、ポシヤった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0885f/>

悪趣味な少年達一生還ゲームー

2010年10月11日19時32分発行